世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

# 半紙を用いた古典臨書から創作への展開：高野切第三種を題材として



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-11-16 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 新倉, 承子 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://mu.repo.nii.ac.jp/records/651 |

# 半紙を用いた古典臨書から創作への展開
## ―高野切第三種を題材として―

A Creation from “Koten Rinsho” Using “Hanshi”
―Based on “Kouyagire Daisanshu”―

新倉承子*
NIIKURA Seiko

### はじめに

「かな作品」をみると、「大字作品」「細字作品」があるが、「古筆」と言われて現存しているかなは、すべて細字である。

本稿は、大学の高等学校芸術科書道の教員養成における「仮名」授業の一端を述べたものである。

現在大学では、受講生が多いこともあり、また高等学校の授業で「大字かな」は鑑賞としての扱いがほとんどである。

そこで、大学の「仮名」の授業では、臨書学習の方法として、机上で出来る範囲の拡大臨書や原寸大臨書等をおこない、半紙等を使用して、細字作品の形式でまとめ、創作作品へと展開する方法を試みた。

### 「筆」について

まず作品を書くには、道具の用意が必要となるので、細字を書くのに必要な道具について述べる。

「細字作品」を書く時は、筆はもちろん「小筆」である。消耗品である小筆は少し作品を書き続けるとすぐに穂先が摩耗してしまうため、同じ小筆を二～三本交替で使うようにすると良い。

「かな」は日本で創られた文字である。かな文化の発展とともに和筆（日本製）も改良されて使われてきた。唐筆は中国で作られている筆なので、中国で生まれた漢字を書くのには使いやすく出来ている。

私は常に和筆を使っているが、唐筆でかな作品を書いてみると、

線のボリュウム感がでず、やや淋しい感じの作品となってしまう。和筆では墨を含ませた部分にたまった墨が、筆を動かすことで微妙に潤渇の変化のある線を醸し出すのでよい。しかし、唐筆は、墨がたまる部分が細いため、墨が続いていかないので、線が細く作品全体が淋しくなってしまう。

渇筆線を表現して、作品に立体感を出す「かな作品」は、「柳葉筆」と言われている柳の葉のような穂先の筆が良い。最近では「面相筆」と言われている細い線を書くとき使う筆もかな作品を書く時には使う。私は細くて鋭い線の臨書の時などに「面相筆」を使う時がある。しかし初歩の学習では、あまり柔らかい毛ではなく兼剛の「柳葉筆」が良いと考える。

学習を続けていくと自分の好みの筆が見つかってくるし、紙との相性もあるように思えるのでいろいろ試してみるのが良いと思っている。

## 「紙」について

日頃細字かなの練習には「改良半紙」を使うよう指導する。改良半紙は表面が滑らかで、墨がにじまず、筆がスムーズに動きやすいからである。改良半紙は薄くペラペラしていて練習用なので、作品制作の時には料紙を使う方が見栄えがする。料紙は色彩・文様・砂子等で美しく加工されているが、半紙より安価なものから、かなり高価なものまで多種ある。手作りで高価なものほど、作られた時期、ちょっとしたドーサの具合で紙面の書き心地が異なるため、多くの作品を書くことで学んでいかなくてはならない。

雅な料紙に向かって書くと、緊張感も加わって、かな書道を学んでいる悦びにも繋がる。そこで授業でも手漉きのものが望ましいが高価なため、安価な印刷加工した料紙等を使用して、料紙の書き心地を味わいながら短冊臨書の作品制作をおこなっている。白い半紙ではない美しい紙を使うことで、墨の濃さによる作品の違い、筆への含墨量による渇筆の表現等が、何度も書いていくうちに、学生たちにも分かってくる。

## 「墨」「硯」について

硯の陸に水を少し垂らし、「の」の字を書くように静かに「和墨」を動かし、硯の窪んだところ（海）にためていく。この時が「かな作品」を書く前の至福の時である。

「墨」も筆同様、和墨・唐墨あるが、製法や膠の配合等、かなには和墨がよい。

小・中学校の書写では、硯で固形の墨を磨るということはほとんどしないで、墨液を使用している。かな書道とくに細字かなでは、多量の墨は必要ないので、墨を磨ることを授業でも経験してもらいたいと思い、硯と固形墨を持参にしている。墨液で大きく漢字を書く授業では味わえない経験も大切だと考える。

最近の学生が小・中学校で使っていた道具に入っている硯は、持ち運びのことを考えてかプラスチック製のものが大半で、磨墨には適さない。最近は墨を磨る部分にはセラミック等が貼ってある物も見かけるが、プラスチックのみの物では、いくら磨っても濃くなら

ないのが実情である。実際授業では墨液一滴に、水を少々加えて持ってる固形墨で混ぜるなどして墨を作っている。墨液のみではネバネバ感が強く、（授業では空調を使用していたりすると少量の墨はすぐに蒸発してしまうため）小筆がスムーズに動かない。

ここまではかな書道の入門期に、道具の選別ということで、大学で話をしていて感じたことなどをまとめてみた。

## 作品制作

### A　半紙に古筆から和歌一首を選んで臨書作品

高野切第三種は「古今和歌集」全二十巻のうち、第十八、十九巻の断簡であるが、字形が平明で初心者の学習に適しているため、必ずどの社の教科書でも扱われている。そこでここでも高野切第三種を題材とした。

各項目の臨書例は巻末に図版として示した。

1、「高野切第三種」から和歌のみを選ぶ〔図版①〕

「しらゆきのともにわかみはふりねれと　こころはきえぬものにそありける」

（古歌を書く場合は、濁点はつけない　古今和歌集1065）

2、文字は原帖のまま、四行の行書きにする〔図版②〕

（行頭をそろえ、連綿しているところではなるべく行替えしないほうが良い）

半紙に「散らし書き」

（俳句や和歌などを書くとき、行頭の高さや行と行との間をそろえて書く書き方を一般的に「行書き」という。また、行頭の高さを変えたり、行の長さや行と行の間のとり方に変化をつけたりして配置する方法を「散らし書き」という。）

3、以上のことを踏まえて、まず行頭に変化をつけてみる

（行頭の中心が高くなっている山型〔図版③〕、あるいは高・低・高・低などノコギリのような形にする〔図版④〕）

4、行間に変化を付ける〔図版⑤〕

（三行めと四行めの行間を広めにあけ、最後2字を添えると、いかにも「散らし書き」らしさが増す）

5、これが半紙に「散らし書き」にした臨書作品の一例〔図版⑥〕

（行と行を組み合わせて「密」な行を紙面の中に創り中心に広い空間をあける〔図版⑦〕）

6、これは「寸松庵色紙」のなかにある散らしで、紙面の右下と左上に散らす「散らし書き」である。〔図版⑧〕（余白の取り方が珍しいので、難しいが学生には人気がある）

### B　臨書の「散らし書き」をもとに「創作作品」を考える

散らし方については、「臨書作品」で説明したので、「創作作品」では主に文字の組み合わせ・使い方・配置について述べる。

作品の中で、同じ字形の文字を繰り返し使うことは避けたい
そこで・変体仮名を使う
・漢字に変換する
同じ文字で思うような字形の文字が見つからないとき
・「散らし書き」にしたときの位置に変化を付ける
・墨色で、あるいは多少文字の大きさで変化を付ける
など同じ文字が目立たないように工夫する

原帖で使っている字形は初めは利用するが、自分のイメージにあった作品に仕上げるため、試行錯誤して何枚も書いているうちに、原帖から遠ざかってしまう。

・書き出しの「しらゆきの」は、歌意を視覚的に表現したいと思い漢字を使ってみる。
（漢字は曲線的なひらがなに調和する、やや柔らかい感じの行書・草書が良い。高野切第三種の中から探したいが高野切第三種には漢字が少なく、ないので、かな同様日本で創られた和様の漢字が調和しやすいと考える。　そこで「和様字典」等で調べるのが良い。または「かな表現字典」などを参考にするのも良い。）
・また「しら」はひらがな、「ゆき」は漢字を使って、「疎」「密」を表現する。
・「ぬ」が２つある。「ぬ」の変体仮名はほとんどない。古筆では、元永本古今集のなかに「努」を源字としたものがあるのみである。（字典で確認するがなく、後々までこの「ぬ」では苦労しそうである）
・「の」「と」「も」「り」もそれぞれ２つあるが、変体仮名で変化が付けられる。

1、以上のことを考えながら、原帖の連綿などをなるべく生かして創作する。〔図版⑨〕

2、行の流れをだすために、文字の概形が長めのものを、行の中に入れると良い。細くて長めの文字は、その部分が簡素になり「疎」「密」が表現された作品になる。〔図版⑩〕
（例えば概形が長く延ばせる文字としてひらがなでは「し」、変体仮名では「布」「身」「耳」「天」など）

3、散らしを上下に分けてみた。〔図版⑪〕（これも寸松庵色紙にある「散らし書き」を少しアレンジしてみた。散らしは、余白をいかに美しく表現するかにある）

これら3点の作品は、私の考えで書いた参考例である。
使った紙がやや墨がしみる紙であるため、潤・渇がはっきり表現された。
「ぬ」の位置・大きさ・字形・墨量には苦労した。

## おわりに

「臨書作品」制作は、展開としては簡単だが、実際やっていくと

さまざまなことが絡み合って、「かな書道」のあれこれを知っていないと簡単に作品完成とはいかない。しかし指導をする上では、何かひとつの基準を作っておかなくてはならないので、ひとつの方法としてまとめてみた。

「創作作品」は、墨継ぎの位置、墨量を考えたり、渇筆の美しさを表現したり、さらにどんな料紙を使うかなど数多くの要素が加わってくるので、授業では時間の関係でじっくり扱うことはほとんど出来ないのが現状である。文字の組み合わせ、紙面への布置・余白の生かし方等、部分練習や説明のみで終わってしまう場合が多く、直に作品として生かすことは難しい。

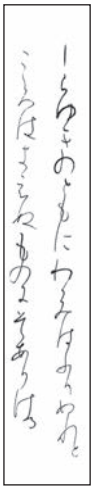
学生には、かな作品に興味を持ったら、多くの作品を鑑賞することで、どんな文字をどのように使っているか？　紙面に余白をどのように生かして収めているか？等を学ぶよう薦めている。

**参考資料**

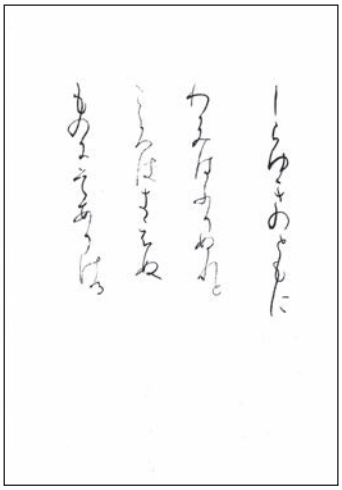
・日本名筆選　高野切第三種　（二玄社）
・日本名筆選　寸松庵色紙　（二玄社）
・携帯かな字典（角川学芸出版）
・かな字典（二玄社）
・かな表現字典（二玄社）
・和様字典（二玄社）
・高等学校書道教科書

＊武蔵野大学教育学部兼任講師

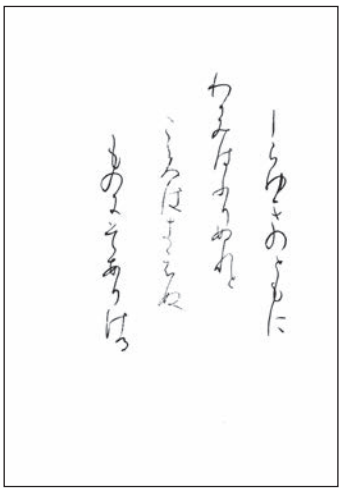
①



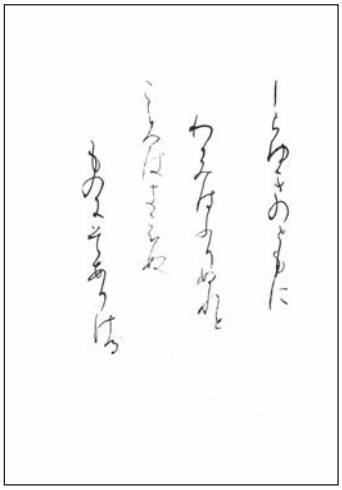
②



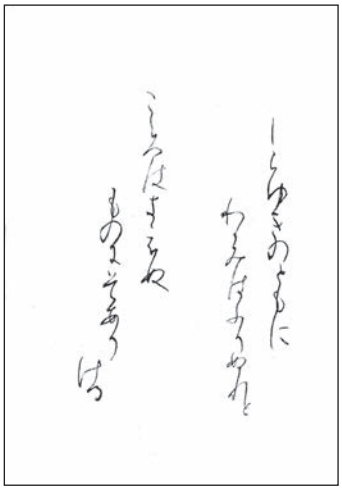
③



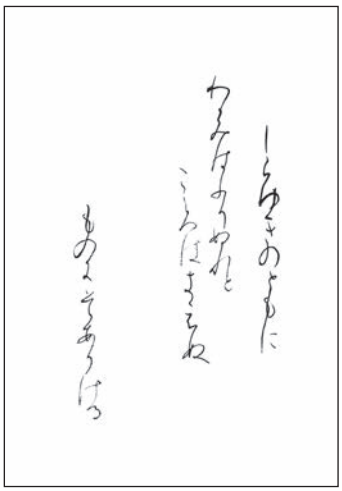
④



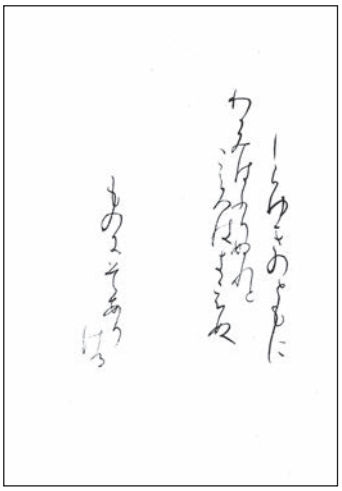
⑤



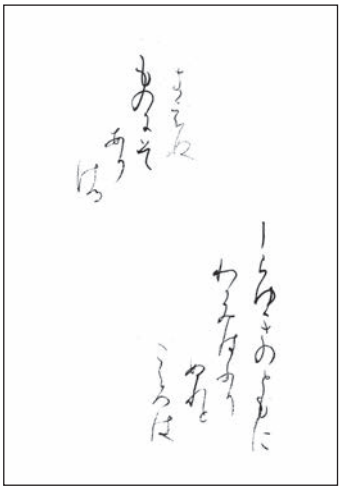
⑥



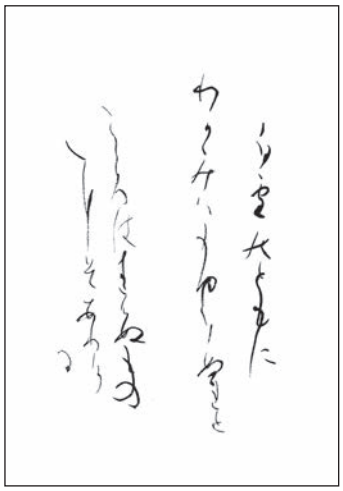
⑦



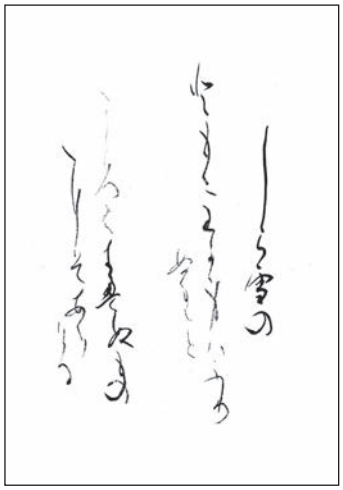
⑧



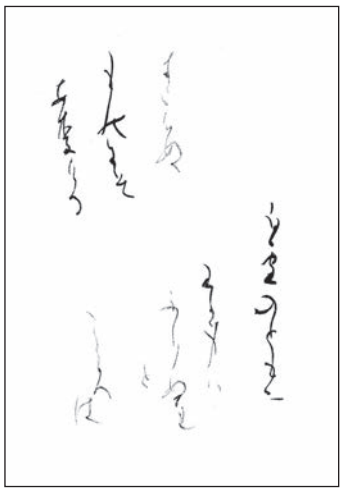
⑨



⑩



⑪



一九